「笑いは気から」
古典落語
「井戸の茶碗」

江戸の麻布谷町に屑屋（くずや）[現在のリサイクル回収業]の清兵衛（せいべえ）さんという、非常に正直者で正直清兵衛とあだながつくほどの方がおられました。

この方がいつものように天秤（てんびん）ざるを担いで通りを歩いておりますと、身なりは粗末ながらもどこか上品な娘に声をかけられます。

娘に案内され裏長屋にいくと、その父親の千代田卜斎（ちよだ・ぼくさい）という浪人から生活が苦しく病気治療の薬も買えないような状態であるため、先祖伝来の仏像を二百文で引き取って欲しいと頼まれます。

しかたなく清兵衛はそれを二百文で預かり、仏像が二百文より高く売れたら儲けの半分を持参すると約束します。

清兵衛が仏像を籠に入れて歩いていると、細川屋敷の長屋下で高木佐久左衛門（たかぎ・さくざえもん）という侍に声を掛けられ、縁起のよい「腹籠（はらごも）りの仏像」ということで、三百文で買い上げられます。

高木佐久左衛門がそのすすけた仏像をぬるま湯で丁寧に磨いていると、台座の下部の紙が破れ仏像の中から小判五十両が出てきます。

すると佐久左衛門は「仏像は買ったが、中の五十両まで買った覚えはない。元の持ち主に返したい」と、手を尽くして屑屋の清兵衛を探し出し、千代田卜斎へ五十両の返却を依頼します。

そういうことで清兵衛が千代田卜斎のところに五十両を届けますが、今度は千代田卜斎が「仏像は売ってしまったものだから五十両が出てきたとしても自分のものではないので受け取れない」と固辞します。

困った清兵衛は長屋の大家が「千代田卜斎に二十両、高木佐久左衛門に二十両、清兵衛に十両」という分配案を出し、それでも千代田卜斎は固辞したので、高木氏へ形（かた）を提供することを提案します。

それならと決着し、千代田卜斎は高木氏への形としてはもう形として渡せるようなものが手元に無かったのです。二人の間に入った清兵衛は困り果て、そんな清兵衛の様子を見て、千代田卜斎はしばらく思案したのち「娘は貧しくともひと通りのことは仕込んであるので高木様がこの娘を嫁にもらってくださるなら支度金として受け取る」と言い出します。

清兵衛がこの旨を伝えると、高木作左衛門は戸惑いながらもきぬを娶（めと）ることを承諾します。

高木作左衛門も千代田卜斎の娘きぬも既に互いを見そめていたので良い結果となったわけです。

おわり

自らを調え、生活を調えましょう

ホームページ　改葬ーさんわ

日出店：速見郡日出町川崎会下（空港道路入口）　TEL（0977）72−6415
三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041（トライアル横）　TEL（0974）22−3301
森町店：大分市横尾2733−1（大東中学入口）　TEL（097）524−6525

さんわ便り

第１７１号
発行所　さんわグループ
編集　広報部
大分市森町

「彼岸によせて」

「暑さ寒さも彼岸まで」と言われますが、今年も春のお彼岸を迎える季節になりました。

お彼岸は、春と秋の二季あり、春は春分の日、秋は秋分の日をはさんで、夫々前後一週間の間を「お彼岸」と言います。

「彼岸」は仏教用語で「悟りの世界・安楽の世界」のことを言います。

一方、私たちの住んでいる世界は彼岸に対してこちらの岸ですから「此岸」と言います。

これは「迷いの世界・苦しみの世界」です。

この彼岸と此岸の間には、煩悩の波が荒れ狂う果てしない海が横たわっています。

その煩悩の波を乗り越えて、悟りの世界である彼岸に渡ろうというのが仏教の教えです。

特に、春秋のこの時期は一年中で最も過ごしやすい時ですから、この季節に彼岸に渡る仏道修行にいそしみましょうということから「お彼岸」というものが設けられました。

今から１３００年以上も前、聖徳太子の頃だと言われています。

今風に言えば、お彼岸はさしずめ「仏教週間」と言えるでしょう。

ところで、お釈迦さまはなぜ私たちに「彼岸に渡りなさい」と勧められたのでしょうか。

そこには大事なことが二つあると思います。

まずその一つは、彼岸という悟りの世界を知ることによって、私たちの世界が迷いの世界だと知ることが出来るということです。

もし、彼岸を知ることがなかったら、私たちは自分が迷っているなどとは到底思いません。

それどころか「私は正しい」と思っています。

人間世界に争いごとが絶えないのは、この「私は正しい」という自己中心の見方しか出来ない心にあるのです。お釈迦さまは「迷っていながら迷っていることに気づかない。それが迷いだ」とおっしゃっていますが、まさにその通りです。

彼岸は、そんな私たちの迷いの心をありのままに映し出す鏡になるのです。

その鏡に映し出されることによって、愚かな我が身が知らされるのです。

知れば「愚かな私でした」と素直に頭が下がります。

ここが大事なのです。

ひとたび頭が下がれば、あらゆるものがこの私を導き育ててくれるものだということに気付きます。

順境も逆境も、敵も見方も、何もかもです。

まさに「我以外皆我諸仏」だったのです。このように、私たちは彼岸を知ることによって、自らの愚かさに頭が下がり、頭が下がることによって、迷いの中にいながら迷いを越えていくという人生が開かれていくのです。つまり私にとって、この世の中に無駄なものは何一つないということがわかるのです。そうして、今一つ大事なことは何かと言いますと、それは「彼岸を目指す」ことによって、私の「いのち」の目的地がはっきりと定まるということです。よく人生は旅にたとえられますが、人生が旅であるならば当然目的地がはっきり決まっていなければなりません。例えば、旅行者に「どちらへ行かれるのですか？」と尋ねて「いやー、どこに行くのか分かりません」という人はまずいないと思います。

もし、そんな人がいれば、それは旅ではなく放浪というものです。

放浪はいつどこで泊まる宿があるのやら、いつどこで食事にありつけるのやらと不安と心配で、おちおち旅も続けられないと思います。

目的地が定まって、初めて安心して旅が続けられるのです。今年のお彼岸は、このようなことに思いをいたし、実りある「仏教週間」にしていきたいと思っています。

「彼岸を目指す」とはまさに私の「いのち」の旅の目的地が定まるということです。しかも、目的地が定まったというだけではありません。彼岸には阿弥陀さまが待っていてくださるのです。

それは、死んだら終いと思っていたこの人生が、「永遠のいのち」を頂く人生に転じられていくのです。

そのことをはっきりと確信できた時、本当に安心してこの人生を歩んでいくことが出来るようになるのです。

南岳山　光明寺
テレホン法話より